



ともかくやってみる

Taiyu Kobayashi

国内トップに
コンピュータを

Episode. 02

「最後のふんばりが力になる」

高度成長期、「漢字をコンピュータで扱うなんて不可能」と誰もが思っていた。富士通は誰よりも先にその夢を信じ、追い続けた。夢の実現を後押ししたのは第8代社長、小林大祐だった。

世界初となる、漢字を自在に操る日本人のための「JEF」。その開発は前例となる技術もなく困難の連続だった。部門を越えた技術者が結集したものの、試行錯誤が続いた。

そんな状況の中、技術者たちが思い出したのは小林が自身の体験をもとに常日頃から言っている言葉だった。「ともかくやってみる。その最後のふんばりが、他人さまより一歩先に伸びていく力になる」。小林の一言は技術者たちの心を奮い立たせ、挑戦の灯を再びともした。

1979年、ついにJEFが世にはなれた。コンピュータの世界を日本語が彩り、あざやかに動き出す。同年度のコンピュータ売上高で日本IBMを抜いて初めて国内トップを獲得した。夢を実現したのは、部下の可能性を誰よりも信じる小林の覚悟だった。「ともかくやってみる」。小林の言葉は技術だけでなく、「人」の心も動かす力になった。

小林 大祐から学ぶ 【挑戦】の極意

Point 1: 仲間を信じる

当時の富士通は日給月給制度であり、コンピュータ開発に没頭すると何日も自宅にこもり、出社するのを忘れてしまう池田の勤務だと、月給ゼロ、賞与ゼロという時期が続いた。そのとき、小林は池田一人のために、固定月給という特例を生み出した。このように、小林は自由奔放な池田の才能を存分に発揮させる場を整えるべく、社内の根回し役となった。

Point 2: 自ら動く

小林は、マサチューセッツ工科大学の軍用技術全集を読み、これからの富士通が取り組むべき新しいテーマの一つとして、コンピュータの開発を会社に提案した。また、コンピュータ市場を開拓するべく、自ら営業の第一線に立った。

Point 3: 最後までふんばる

「人間というものは、ぎりぎりの状況に置かれないと、あまりいい知恵は出ないものである。机の上でぬくぬくして、環境のいいところでは、かえってひらめきは鈍る。断崖絶壁の上に立って、なんとかここで生きる道を考えようというときに、初めていい知恵がしばり出されるものだと思う。だから『とてもこれはできないかな』と思うことでも、ともかくやってみる。その最後のふんばりが他人さまより一歩先に伸びていく力になる。」と話している。

小林 大祐

池田の入社当時の上司であり、1976年に富士通の第8代社長に就任。FACOM Mシリーズの成功や日本語情報システムJEFの開発を主導し、1980年に富士通を国内コンピュータ売上高トップに押し上げた。

